

写真屋の物思い

神戸のある一角に、古臭い写真屋が佇んでいる。

創業から言えば老舗となるのだが、現在のデジタルカメラとスマートフォンの普及をみれば、かなり経営が傾いた状態であることは容易に察しが付く。それでも顧客はついている。

写真屋の名前は「タチモトカメラ」という。

デジタルカメラもそうだが、銀塩を愛する人も、まだ多くいる。

そんな拘りの人たちは、フィルムカメラでないと思いつりの画が出せないという。その意見に賛同する主人、立本勇作はこの道三十年のベテランである。

若い頃、大手のカメラ店に入社して、カメラ販売と営業を行っていた。

まだ当時、現像とプリントは一般のカメラ・写真店では行っていなかった。

いわゆるメーカー送りでの現像を発注していたのだ。フィルムには大きく分けて二種類ある。

ネガとポジだ。

一般の客はラチチュードの幅が広いネガを使う。

この場合、多少露出がプラスマイナスにぶれても、大体の画にはなる。

ところがポジの場合は可成りシビアで、露出がプラス、マイナス0.5ズレてしまつと、露出オーバーやアンダーに大きく左右される。

但し、これらをうまく調節して露出をコントロールした場合、素晴らしい一枚となる。

多くの銀塩を愛する人たちは、出来上がるまでのその瞬間を、待ち侘びるのが好きだ。

しかしながら、現実、フィルムカメラの使用率はかなり低い為、フィルムも全盛期と比べると恐ろしく値段が高い。

ポジであるダイレクトプリントなど、高額である。

その点に置いては、デジタルカメラであると、撮った瞬間に画が分かる為、失敗したらすぐに削除して、新たに撮ればよい。

しかもPCを持つていることも条件になるので、プリントせずともモニターに写し出して確認出来るメリットがある。

デジタルスチルデータを保存するメディアも、SDカード128GBなど安価で買える。

それでもフィルムを使うメリットは、やはり個々の拘りなのだろう。

「ゆうさん、久しぶり！」そう声を掛けながら店内に入って来たのは、長年の常連客である浅田明というセミプロである。

「景気はどうよ？」にかつと笑みを見せる顔が、五十路を超えているとは思えないほどの童顔さが、いたずらっ子のようである。

立本が左手を振りながら、苦笑した。